

1. テキスト

『働くものから見るものへ』、西田幾多郎全集（旧版）第四巻、204頁8行目から207頁最後まで。

2. テキスト要約

第2段落

- ① 直観は自ら思惟を含まなければならない（前段落、芸術家の直観の例）ように、思惟の徹底は自ら直観に至る、という脈絡。
- ② すなわち、概念的統一（一般＝特殊）の徹底（極致）は矛盾的統一（一般＝唯一なるもの・個物）に至る。
- ③ 経験的知識の根柢に横たわる具体的一般者が矛盾的統一に到達するに従って、物の概念より働くものの概念に到り、さらに働くものなき働きの概念（純なる作用の概念）に到る。例えば [この赤（経験的知識）→この木の葉（物）の赤→この木の葉の運動（緑から赤へ、キーネーシス）→命の活動（形相から形相へ。その視点から個物から個物へ。エネルギー）＝「自己の中に自己を映す」]
- ④ 以上のプロセスは認識論的には、「超越的なるもの（感覚的なるもの・非合理的なるもの）」が「私の表象」として内在的となり合理化されることである。それは「時」（一般）が「すべての否定を含むことによって唯一のものを限定すること」であり、かくして「時に於ける唯一なるもの」（今）と「唯一なるもの」（今）との直接的な関係となることである。その際「具体的一般者の特殊化の方面が時」であり「一般化の方面が力」である。さらにそれは「感覚的なるもの」が「内包量」（度）となり、「働くもの」として「時」において顕現することである。
- ⑤ しかし「力の概念に於ては、未だ真に超越的なるものを内在化する立場に徹底することはできない、尚外的なるものが残って居る」。すなわち「超越的なるもの＝外的なるもの＝表象の内容」が与えられているということである。したがって主客対立が残る、「外に働くものを考える」ということになる。
- ⑥ それ故「純粹統覚」は単に「表象に伴う自己」ではなく「表象其者を自己の表現」となすものでなければならぬ＝考える私が表象に伴うのではなく（つまり客に対立する主を滅し表象そのものに成り切り）「表象が表象自身を映して行く」。故に「働くものの概念は知るものに至って、その根柢に透徹する」。（この「知るもの」は純粹統覚の徹底としての直観・自覚であろう。）
- ⑦ 「知るもの」において「具体的一般者」の三つの働き、すなわちすべての特殊の否定と肯定、一般者の無が成就している。そこに「意識」が成立する。

第3段落

- ① 「具体的一般者」は「自覚の鏡」である。無内容な「自己同一の判断」は「鏡面其者」を示すものである。
- ② 反省作用其者が自己の中に映されない（自覚されない）限り、一般と特殊との間の間隙を除くことはできない。判断の主語面と述語面が合致しない。（英国の地図を描き続けるのみ。合わせ鏡がどこまでも続くのみ）
- ③ 判断は反省的方面を現すものである（だから自覚されないと成り立たない）。それは「純粹視覚」が「映すものと映されるものが一とならない限り」、「無限に深く自己の中に自己を映し行く」のみで、いつまでも（外に）「超越的なる本体」を追いか求め、一方で（内に）抽象的概念を抱え続ける（見る、ということが成り立たない）のと同様である。
- ④ これに対し「自覚の立場」では一般的なるものは第一に「物」を包む「空間」となり、第二に「力の場」となり、最後に「意識の野」となる。「意識の野」に至って「一般的なるものが真に自己自身を無にする」ということができる。

- ⑤ 「包括的意識」（誰かの意識、というものであろう）があれば「真の意識」はなくなる。「意識は互いに相否定することによって成立」する。すなわち独立的に存在するとされた包括的意識が相互否定を通じて、自己否定し、「真の意識」に到る。かくして「我々の意識の底は絶対の無に通じて居る」。そこから「意識」は一々が独立でありながら、相互に直接に関係する（ということになるであろう。ただし個物と個物の相互否定と直接的な関係との関係は明らかではない）。
- ⑥ ここにおいて、「一般が消滅すると共に特殊から特殊に通ずる」という事態が成立する。「我々の意志自由の確実は之に基く」。
- ⑦ 「意志は判断を逆にしたもの」である。その意味を少し考えて見ると、確かに一般が特殊を限定するという判断の在り方において特殊の意志自由はない。したがって意志自由は創造的であり、特殊が一般を限定する。それ故意志は判断を逆にしたものと言ったのであろう。
- ⑧ 最後に「一方には色自体の体系として、一方には色の概念の体系として、相対立したもの」とあるのは、客観的な超越的不変的基体と主観的な類概念との対立を言っている。それが「今は一つの芸術的直観となる、創造的意志の統一」となる。そうしてかかる「創造的意志の統一は無の統一でなければならぬ」とこの論文が締めくくられる。やはり最後に「芸術的直観」が来ている。西田の根本経験を考える上で興味深い。西田は根本経験を諸宗教の同一なる根本、さらには道德・宗教・芸術・哲学の同一なる根本に考えていたと思われる。